DYNAMIS, **5** (2001), *27–51*

否定の構文

—生格と関連して—

山口　巖

(1) はじめに

§1　ロシア語には他動詞が否定されると対格に立つ目的語が生格に変えられるという現象があります．また存在を表す動詞が否定されると主語がなくなって非人称文になり，肯定文で主語になっていたものが生格になるという現象もあります．

たとえば，

(8) Я не писáл письмá.
　「わたしは手紙を書かなかった.」

(9) У меня нет кни́ги.
　「私のところには本がない」
　＝「私は本を持っていない.」

というようなばあいです．

この二つはふつう区別されないで「否定生格」genetivus negationis と呼ばれています．確かにこの二つの「否定生格」は同じ原理に基いていると考えられるのですが，存在動詞ではほとんどのばあいが否定生格を用いるのに，他動詞のばあいにはかならずしもそうではありません．それでこの二つは一応区別して，「否定生格」と「存在否定の生格」としておきたいと思います．

(2) 存在・非存在文の構文的特徴

§2　存在を表す構文は多くの言語において，外の文章の構文とは違ったものを使う傾向があります．たとえば英語では there is/are のような構文を使いますし，ドイツ語では geben「与える」という動詞を使って，es gibt という非人称構文を用います．またフランス語では avoir「持つ」という動詞を使ってやはり非人称の構文 Il y a のよ

うにします．ドイツ語のように「与える」を意味する動詞を使うのは珍しいのですが，「持つ」という動詞と「ある」という動詞とは多くの言語で使用されています．英語の場合でも，たとえば We have much snow in Japan. のように，have 動詞を使うこともありますが，be 動詞による表現の方が普通だということができます．

さて，これらのいくつかの言語について，肯定と否定という面から見てみると，たとえば英語のばあいには there is/are と there is/are not というように，両方とも be 動詞が使われています．フランス語のばあいにも，Il y a に対する否定文は，部分冠詞といわれる de を伴いますが Il n'y a pas de のように，have 動詞に当るものが使われています．このように，肯定と否定とが同じ動詞によって表現されるばあいを，仮に「対称的」使用ということにします．

一方，たとえばポーランド語のばあい，肯定文はたとえば Tu jest twoja książka.「ここに君の本がある」というように，być「存在する」という動詞を使います (jest は三人称単数現在)．しかし否定になりますと，Tu nie ma twojej książki.「ここには君の本はない」というように，imieć「持つ」という動詞を使い，かつ非人称構文になります (ma は imieć の三人称単数現在)．従ってこれは非対称だということになります．

(3) 存在文・非存在文における場所の意義

§3　さらに人称文と非人称文という面から見ますと，存在動詞を用いるばあいには人称文ですが，「持つ」という動詞，および「与える」という動詞を用いるばあいには非人称になります．ただし，ロシア語のばあいには，その例外で，否定において存在動詞を使いますが，非人称文を用います．すなわち，ロシア語の否定の存在文に用いられる動詞 нет は，もともと нѣтуть の縮約された形なのですが，この нѣтуть は не-е-туть であり，さらにこれは否定の не- に存在動詞 быть の現在形 есть の語幹部分 е に「ここ」という場所を表す副詞 туть がついた形なのです．フランス語の存在文の Il y a も，「持つ」を意味する avoir の 3 人称現在の形は a ですが，y はやはり場所を表す小詞なのです．さらに英語のばあいを考えて見れば，there というのは場所を表す副詞です．

こういう風に考えて見れば，「存在」という概念には，何か「場所」というものが，本質的な構成要素になっているような気がします．インド・ヨーロッパ諸語とは全く異なった構造を持つ，アフリカの大語族であるバントゥー語族に属するスワヒリ語には，特定の場所を表す接辞要素 po，不定の場所を表す ko のほかに，場所の内側を表す mo

があります．これにたとえば人称を表す接辞要素 ni をつけて，ni-po といえば，「私はいる」tu-mo 「私たちは中にいます」などという意味になります．また yu-ko? といえば，「彼はいますか？」という意味になります．

(4) 存在の認識論的意義

§4　そこでいま存在ということの事実関係を考えてみましょう．何かが存在しているということは，その何かがある場所の構成要素となっていることでなければなりません．そうでなければ，ものが具体的に「存在している」というイメージは作ることが難しいはずです．そこで「存在」という観念には，ある対象がその一部となっている場所の観念が必要であるという仮説を立てることにしてみましょう．

次に「存在しない」という事態を考えてみましょう．これはなかなか厄介な問題です．ないものをあたかもあるように考えて，その存在を否定する，ということを意味しているからです．なぜなら，私たちは寝そべって空を眺めながら，わたしは「ねむっていない」とも，「立っていない」とも，「歩いていない」ともいうことができます．「寝そべって」いるのでなければ何を想定してもいいわけです．ものについても，がらんとした部屋の中で，ここには「本がない」とも，「ソファがない」とも自由にいうことができます．言葉というものには，そういう性質があるのです．否定という現象の難しさはまさにこの点にあります．

§5　このようにしてみれば，何かが「存在しない」というのは，「存在する」ということよりも，遥かに難しいことがわかります．第一段として，何かを「あたかもそれが存在しているかのように」想像しなければならないからです．数学のばあいを考えて見れば，存在する例を一つ挙げれば証明はすみますが，存在しないことを証明するためには，帰納法によるのでなければ，すべてが存在しないことを証明しなければならないのです．

これを手っ取り早く証明するには，ある場所を限定してある対象がそこの構成要素にはなっていないということが必要でしょう．そうすれば，場所の観念は，存在否定のばあいにより必要性が高いということになります[1]．

(5) 行為の認識に関する主語の役割

[1] 存在文と存在否定文については、かつて筆者が論じたことがあります．「存在文と存在否定文について」，『言語研究』第 75 号　昭和 54(1979) 年，pp.1-30．再録：古代ロシア研究　特別号『ことばの構造とことばの論理』1998, pp.235-259.

§6　これが単なる仮説にすぎないかどうかを検証するためには，もう一つの仮説が必要です．非人称の意味です．しかしそのためには，あらかじめもう一つ，「主語」というものについて考えてみる必要があります．たとえばここに「犬」という動物がいると考えてみます．この犬が私の左手から右手に移動したとします．私がこの動物を見ているすべての瞬間において，見えるものは「犬」でしかありません．しかしそのときに私は「足」と呼ばれる4本の突起が交互に忙しく動くことも同時に観察しています．これを私たちは「歩く」あるいは「走る」という「行為」であると認識するのです．もしそうだとするならば，「行為」というのはそれ自体何か独立に存在するものではなくて，たとえば「犬」というものの状態の変化を基礎にして私たちが認定するものだということになります．再びそうとすれば，「行為」というものは「行為」と認定する対象の状態の時間的変化の「様式化」なのであって，その状態の変化の担い手である対象とは切り離すことができないものだ，ということになるでしょう．「行為」に「主語」が不可欠であって，主語を欠くと意味をなさなくなるのはこのためだと考えられるのです．

(6) 非人称文における「場面」の意義

§7　もしそうだとすると非人称文のばあい，状態の変化の担い手になる，すなわち主語に当るのは何か，という問題が生じてきます．もしそのようなものがいらないということであれば，今述べた主語についての仮定は間違っていることになるでしょう．もしこれが正しいとすればそれはどのようなものと考えられるでしょうか．

私は非人称の主語となるのは，場面そのものだと考えています．この仮説の当否を決定するためには，もっとほかの例証が必要ですが，今は一つの例だけを挙げるにとどめます．これは一般意味論の問題でもあるのですが，日本語で「雨が降る」というのは「同語反復」tautology だというのです．すなわち，「雨」というものは現実には存在しないのです．存在しているのはたくさんの「水滴」にすぎません．この水滴が空から降ってくるとき，私たちはそれを「雨」というのです．したがって「雨」という概念には，すでに「降ってくる」というプロセスの概念が含まれているのです．したがって「雨が降る」というのは，いわば「「降ってくる水滴」が降る」となって，同語反復になる訳です．そうとすれば，英語やフランス語，ドイツ語，ギリシア語やラテン語のように，動詞で表すことが正しいということになります．たとえばラテン語では「雨が降る」は pluvit といい，ギリシア語では húei または brékhei (ὕει, βρέχει) といいます．

共に 3 人称単数の形を取っています[2]．そのばあい，人の認識の仕方を考えて見れば，ある空間に水滴が降るという過程が行われるという場面によって，雨が認識されると考えることができます．これは非人称がある場面そのものを基礎とするものだ，と考えるのです．すなわち，これが場面という隠された主語のために，見かけ上主語のない，非人称文になる理由だと考えるわけです．

§8　ロシア語の場合には現在では Дождь идёт. というように，「雨」は日本語と同じように名詞になっていますが，古くにはやはり非人称動詞であったらしく，ДЪЖДНТЪ という形が見えます．また моросúть「そぼ降る」という動詞は，人称形にも非人称形にも用いられるようです．たとえば，Как сквозь сито, моросил противный осенный дождик.(Чех.) および Все время моросило, на дорожке стояли лужи, трава была мокрая. (Арсеньев) と辞書に見えます．この語源についてはさまざまな説があって，はっきりしませんが，先に挙げたギリシア語の brékhei に関係づける学者もいるようです．

以上のことから，非人称動詞というのは，この動詞によって表される過程が生じる対象が，場面であると考えるのです．たとえば「死ぬ」という動詞の場合，その過程がふつう主語とされている生き物の体の上に起るわけですが，そういう過程の起る場所を，ある場面の全体だと考えるのです．

この仮説の論証には，すべての非人称の使用について考察する必要がありますが，ここでは省略します．ただ，私がこの仮説に到達したのは，逆に非人称構文を考察した結果なのです．

(7) 存在否定文における生格の意義

§9　以上の仮説に基づけば，たとえばポーランド語のばあいのように，存在文のばあいには存在動詞「ある」による人称文が用いられるのに，存在否定文になると非人称の「持つ」が用いられるのはよく理解できます．場面を主語にすることによって，その場面はある対象を持っていない，すなわちある場面にはその対象は存在しないことを確実に示すことになるからです．

存在否定の生格についていえば，生格というものがもともと関係を表す格であると

[2]ギリシア語の場合，Ζευς ὕει あるいは Ζευς βρέχει「ゼウスが雨降らす」という言い方が辞書にあります．サンスクリットの場合，βρέχει に対応するのは，おそらく vr̥ṣ-, varṣati だと思われますが，これにも「インドラ神が雨降らす」という表現があると辞書にあります．ここからインドヨーロッパ語では古くには「雨を降らす」という意味だったのだと言う人もいます．

考えられることから，本来存在しないものについて，それが存在すると仮定すること，すなわち「ある対象についていえば」というほどの意味になると考えるのです．現実に存在しているものはある場所に存在しているが故に，主格によって示されるのが当然でしょう．しかし，本来存在していないものに言及しようとすれば，それは話し手の脳裏に存在するに過ぎないものですから，聞き手に対しては，「ある対象について問題にすれば」，「あるいはある対象に関していえば」というように，話題ないし話のテーマとして提示しなければなりません．これが存在否定の本質だと考えるのです．

§10　ここでは存在文における否定生格だけを問題にしていますが，たとえば日本語で「本が机の上にある」といいます．この否定文は通常ならば「本は机の上にない」となります．日本語のばあい「ガ」格は主語を示し「ハ」格は主題を示す，というのが有力な説となっています．その根拠となっているのは，いわゆる「二重主語」と呼ばれる構文です．その典型的なものはたとえば「象は鼻が長い」というような文です．このばあい主語は「鼻」であって，「象」は主題を表すのだ，という訳です．言い換えればこの文は「象に関していえば，鼻が長い」ということになります．日本語の存在文は，肯定文のばあいには例えば「本が机の上にある」といいますが，否定文の時には，「本は机の上にない」と言います．このように日本語の存在文が，肯定文と否定文で「ガ」格と「ハ」格という，非対称を示すのは，存在否定文のばあい，存在していないものをあたかも存在しているかのごとく想定するために，主題としてこれを提示するのだと考えれば，よく理解できます．もしそうとすれば，これはロシア語の否定生格と根底において通じるものがあるということになります．

序でに逆のばあいを考えてみましょう．「本は机の上にある」と「本が机の上にない」というばあいです．最初のばあいは本が話題となっているときに，「本についていえば，(それは) 机の上にある」という意味だと考えられます．したがってこのばあい，「本」は具体的に存在し，この場面で問題にされている，特定のものに違いありません．英語ならばこのばあい定冠詞がつくことでしょう．逆に「本が机の上にない」というばあいにも，「本」の実在性については疑われていません．したがってこの「本」は机の上にはないけれども，そのほかのところにあることを，言外に物語っています．したがってこれは真正の存在否定文ではなく，存在文の変種であるということができます．「限定

的非存在文」とでも名付けることができるものです.

(8) 本来の否定生格

§11　それでは肯定文で対格に立つ目的語を否定文では生格におくという，一般的に否定生格と呼ばれているものの場合はどうでしょうか．ロシア文法ではこの条件を満たす文が必ずしもすべて否定生格を持つとは限らないことが知られています．どういうときに生格にならないで，対格のままで否定文に用いられるかについては，文法で色々細かい条件を付けています．しかしどうしてそうなのかは，余りよく分りません．かなり場当りな説明がされているのが実状です.

ところで他動詞による構文の否定というのは，どういうものでしょうか．これは存在の否定とどの点で同じで，どの点で異なっているのでしょうか．このことを明らかにすることによって，否定一般の性格づけと他動詞否定構文の特殊な性格が明らかになるかも知れません．そういうわけで，この問題を一般的に考えてみることにします.

(9) 他動詞否定構文の意味的特徴

§12　他動詞否定構文の場合，通常は動詞が否定されます．たとえば Я читал книгу.「私は本を読んでいた」etc. < Я *не* читал книги.「私は本を読んでいなかった」etc. この時，一般的には「私」は「本を読む」という行為以外ならば何をしていてもよいということができます．実際には「私」は「ケーキを食べていた」かもしれませんし，「居眠りをしていた」かも知れません．ただ「私」は「本を読んでいた」ということだけは言ってはならなかったのです．上に挙げた否定構文は，実際にはそういっているに過ぎないのです．これは自動詞を用いるものであれ，他動詞を用いるものであれ，否定構文一般を通じて言えることだろうと思います.

しかし目的語に注目してみると，ここには二つの場合があることが分ります．一つは動詞で表される行為が否定されるに伴って目的語の存在も否定される場合です．「私」が実際には「ケーキを食べていた」のに，「私は本を読んでいなかった」といったとすれば，本の存在は行為の否定に伴って否定されます．本などは初めから存在していなくても，そういうことはできるし，嘘ではない (即ち真理値が True である) ことになります.

一方，行為の否定にも拘らず目的語の存在が否定されない場合が考えられます．たとえば Я читал эту книгу.「私はこの本を読んでいた」→ Эту книгу я не читал.

「この本は私は読んでいなかった，読んだことはなかった」etc. のような場合です．このときには行為そのものは確かに否定されていますが，ここで指されている「本」は，現実に存在しているのです．このようなことが起るには，今挙げた例のように，「この」などというような指示代名詞によって修飾する場合が考えられます．

このことから，自動詞を述語とする自動詞構文の中で，なぜ存在を表すものだけに限って述語が否定されると主語が生格になるかも，うまく説明できます．存在を表す動詞の場合，これが否定されると，必然的に主語で表すものの存在も否定されるからです．

(10) 他動詞否定構文における否定生格の使用

§13　否定について比較的詳しく述べているのは，いわゆる 80 年文法です [2]．従って，以下ここで述べられていることについて，今述べた観点から見ていくことにしたいと思います．

まず，быть 以外の存在を表す動詞を考えてみます．その典型的なものは существовать「存在する」です．この種の存在動詞 verba existentiae が否定されたとき，主語で示された対象の存在そのものが否定されることになりますから，быть と同じく主語が生格になり，非人称文になることは当然と思われます．たとえば，

Проблем не существует.「問題などはない.」

80 年文法は「義務的」な性格を持つものと，「選択的」な性格をもつものとに分け，次のように述べています．

1) 義務的な否定 (生格) をもっている文は不定あるいは一般化された主語について述べることが多い．Без потерь войны не бывает.(Симон.)「損害のない戦争はない.」A легкого нам не обещано.(Симон.)「我々の行く手は容易ではない.」Таланта ради таланта не существует.(Тендр.)「才能のための才能などは存在しない.」

選択的な否定 (生格) をもっている文は特定で既知の主語について述べることが多い．Между тем положенный срок прошел, и апелляция не была подана.(Пушк.)「そうこうするうちに約束の期日が過ぎ，上告はなされなかった.」Он знал, что его лучшая картина еще не написана.(Пауст.)「彼は彼の代表作が未だ書かれていないことを知っていた.」Ни одна из этих книг не была написана полностью, до конца.(Исак.)「これらの書物のただ一つとして，完全に，最後まで書かれてはいなかっ

た.」

2) 義務的な否定 (生格) をもっている文は主語の非存在について述べることが多い. 一方選択的な否定 (生格) をもっている文では, 主語の存在は排除されない. Не было написано ни строки.(Леон.)「一行も書かれていなかった.」Не было сказано ни слова.(Пауст.)「一言も言わなかった.」Однако к концу второй недели Нина чувствовала себя на стройке такой одинокой, как и в первый день — друзей у нее не появилось.(Ант.)「しかし二週目終りになっても, ニーナは建築現場で最初の日と同じように自分が孤独なのを感じていた. 彼女のもとに友達は誰も現れなかったのである.」および, Но время шло, казаки не появлялись.(Зощ.)「しかし時間は過ぎていくのに, コザックたちは現れなかった.」Стихотворение не сохранилось, и я не помню ни одной строчки из него.(Исак.)「その詩は残っていない. そして私はその中の一行も覚えていない.」Статья его не появилась в печати.(Е. Пермитин)「彼の論文は印刷されなかった.」[2, II. *p.403*]

§14　以上のことから, 80 年文法は特定・不特定という基準と, 存在・不存在という基準および既知・未知の三つで自動詞的な否定文を分類していることが分ります.

構　文	特定性	存在性	既知性
義務的否定	−	−	?
選択的否定	+	±	+

ここで ? としているのは 80 年文法では明確な言及がないことを表しています. 80 年文法をも含めて多くの文法が, 用語の定義を明確にしないで使っている場合が多くあります. 存在性というのは話し手が考えている一定の場面 (あるいはこの世の中) に実在していること, と考えてもよいと思われます.

(11) 定性と不定性の意味

§15　それでは特定性というのは何を意味しているでしょうか.『言語学事典』によれば, 定性・不定性は次のように説明されています.

発話の意味のカテゴリーの一つ. その機能は名詞の現実化 акутуализация および確定 детерминизация, 描写する状況においてそれが唯一のものであることを示すこと (定性), あるいはそれに類似した諸現象のクラスに対する名詞の関係の表現 (不定性) である

[3, *p.349*][3] .

印象としては，同じあるいは同じようなもの (同一のクラス) からある具体的な個物を区別 (同定) することだと考えられます．しかしたとえば「一年生のうち，サクラ組だけは動物園ではなくて植物園に行くそうな」というとき，「サクラ組」は特定ではないでしょうか．もしこれを特定な対象と考えるとすれば，上に引用した『言語学事典』の説明の後半は正しくはないことになります．これが「類似した諸現象のクラスに対する名詞の関係」を不定性の定義としているからです．

このようなことを考えて，「定性」の定義を，ある名詞が指すことのできる外延に所属する個別的な要素あるいは部分クラスと関係づけること，としたらどうなるでしょうか．この場合には「サクラ組」は特定なものになりますが，同時に「日本人は自己主張が弱い」という文章の「日本人」も特定のものということになります．これは私たちの言語感覚から何かずれているような感じもしますが，たとえば The eagle is the king of birds. あるいは The rich should help the poor. のような英語の総称用法といわれる the を説明するのには適しています．

(12)「既知性」という概念の問題

§16　「定性」をとりあえずこうしておき，「不定性」は「定性でないもの」としておきます．そうすると次に問題になるのは「既知」と「未知」の問題です．これは「定性」・「不定性」のカテゴリーと密接に関連しているように思われます．既に特定できているものは既知であると考えられるからです．これには前に既に述べられている事象も含まれると考えられています (既言及性)．しかし一方ではたとえば「この事件の犯人は未だ特定できていない」という文章が考えられます．この文章は正しい文章だと思われますが，このとき「この事件の犯人」は特定できていないという点で「不定」と考えるべきでしょうか．あるいはまた，未だ捕まっていないので「未知」だと考えるべきでしょうか．

私はおそらく言語はこのような場合，「この事件の犯人」を「特定」で「既知」のものとして分類しているのではないかと思います．もしそうとすれば，この文は内部で矛盾してしまうように見えます．私がこれを「既知」ではないかと考えるのは，「既知」で

[3]Одна из категорий семантики высказывания; функция ее — актуализация и детерминизация имени, демонстрация его единственности в описываемой ситуации (определенность) либо выражение его отношения к классу подобных ему феноменов (неопределенность).

あるか「未知」であるかは，話し手と聞き手の間で，何について話しているのかが了解されているかいないかだと考えるからです．すなわち「この事件」がどういう事件について話しているのかは話し手も聞き手も分っていると考えられますし，また誰かは特定できていないにせよ，犯人がいなければ「この事件」が起らなかったことも了解済みだと考えられます．

もしそうだとすれば，「既知」であるというのは「犯人」が具体的に誰であるかを特定するかどうかではなく，「犯人」が存在するということの了解だと考えることができます．言い換えれば「既知」というのは，ある集合の内包[4]についての，話し手と聞き手の了解であると考えるのです．「名付ける」という動詞と関連して述べましたように [6, *pp.202-203*]，固有名詞の時でも，要素が一つしかない集合を考えるとすれば[5]，このことは「犯人」の場合にも妥当だと考えられます．もしそうとすれば，犯人が未だ「特定できない」という場合の「特定する」ということは，今述べたような「既知」の内包である犯人の外延が未だ特定できないということ，言い換えれば集合は既知のものとして特定されているけれども，それに含まれている要素が特定できていないということであって，レヴェルが異なっていると考えられます．そうすれば，この文は内部的な論理的矛盾を持つものではないことになりましょう．

(13) 不定接辞

§17　こういう考え方の一つの傍証になるかもしれないと思われるのは，ロシア文法で「不定」とされている -нибудь，-то および -либо という接辞です．80 年文法ではどういう訳か余り触れていませんが，チェコ版のロシア文法 [1] では不定代名詞について次のように述べられています．

> 不定代名詞はそれと相関する実質，性質，状況などが話し手の観点から不定である，即ち具体的な特定を行わないことを表すか，あるいは話し手が所与の現象のより詳しい規定あるいは具体化を行うことが必要でないと考えていることを表す．不定性という一般的意味によって不定代名詞は疑問代名詞と接点を持つが，予測される答え，即ち聞き手の側か

[4]例えば「哺乳動物」のようなある集合があるとき，「哺乳動物」にあたるものを「内包」intension といい，この「内包」に基いてできた要素，すなわちすべての哺乳動物の集合を「外延」extension といいます．

[5]例えば *They elected him president of USA*. というばあい，*president of USA* という内包に含まれている要素，すなわち外延は，だだ一つです．

らの不定性の除去を目指していないという点でこれと異なっている [1, II, *p.362*][6] .

チェコ版ロシア文法はこのような一般的な説明に続けて，さらに不定代名詞の種類について述べていますが，上に述べた -нибудь，-то，-либо については，次のように説明しています.

(1) -нибудь を持つ代名詞に結びついているのは「不定性」と「具体性の欠如」という特徴である．Ему́ про́сто хоте́лось пе́ред кем-нибудь вы́сказаться.「彼はただ，誰かに自分の思っていることを言いたいと思った.」 — Что́-нибудь приду́маем.「何か考えましょう.」 — Тру́дно было что́-нибудь различи́ть.「何かを識別するのは難しかった.」 など．同様の特徴は -нибудь を持つ形の多少とも文章語的な変種である，小詞 -либо を持つ代名詞にも存在している．Пусть кто-нибудь / кто-либо зайдёт туда́.「誰かあそこに立ち寄らせよう.」

(2) -то を持つ代名詞は「不定性」と結びついているが，「具体性」という特徴に関しては多少とも無標的である．より狭義にはこれらは具体性を前提とする．На стене́ кто-то писа́л ме́лом.「誰かが壁にチョークで書いている.」 — Чем-то это напомина́ло Москву́.「これは何かしらモスクワを思わせた.」 — Я что-то пробубни́л.「私は何かをぶつぶつ言った.」 など．一方別の文脈ではこれらは -нибудь を持つ代名詞と重なり，具体性の欠如を表す．На́до же бы́ло кому́-то / кому́-нибудь брать на себя́ тяжёлую забо́ту о больны́х.「誰かが病人を看取るという難しいことを引き受けなければならなかった.」 またある意味では逆の現象も見られる．即ち -нибудь を持つ代名詞が具体性の存在を排除しない文脈で用いられることである．Не зна́ю, про каки́е слова́ он упомина́л. Помере́щилось ему́ что́-нибудь.「彼がどういう言葉のことを言ったかは分らない．彼の頭に何かが浮んだのだ.」 — Я реши́л, что она́ хо́чет еще что́-нибудь сказа́ть мне.「彼女がもっと何かを私に言いたいのだと思った.」 など．このような場合には事件の存在についての叙述が後者 (*i.e.* -нибудь) にある程度の蓋然性を付与し，мо́жет быть

[6]Неопределенные местоимения выражают, что соотнесенные с ними субстанции, признаки, обстоятельства и т.п. являются с точки зрения говорящего неопределенными, т. е. не поддаются конкретной спецификации, или же говорящий не считает нужным приводить более подробное определение или же конкретизацию данного явления. По общему значению неопределенности неопределенные местоимения соприкасаются с вопросительными и отличаются от них ненаправленностью на предполагаемый ответ, т.е. на устранение неопределенности со стороны адресата.

「おそらく」, должнó быть「きっと」, вероя́тно「おそらく」などのような表現が明示的に，あるいは少なくとも暗示的に存在していることを前提とする [1, II *pp.363-364*][7] .

§18　チェコ版ロシア文法は，これらの不定代名詞を「定性・不定性」と「具体性・具体性の欠如」という基準で特徴づけようとしているように見えます．-нибудь はもともと кто ни будь「たとえ誰であっても」という句から作られたもので，「不定性」と「具体性の欠如」によって特徴づけられると言うのは，その限りではよく理解できます．しかしこれに対して -то をもつものが「具体性・具体性の欠如」という基準に関して無標的であるというのは理解に苦しむところです．これは例に挙げられているように，-то が -нибудь と競合して，「具体性の欠如を表す」場合を想定したためかも知れません．しかしもしそうだとしたら，-нибудь を持つものが「具体性の存在を排除しない」場合には -то を持つものと競合するのに，なぜ「具体性の欠如」によって特徴づけられるのかが，問題になりましょう．この説明は内部的な整合性を欠いていると言わなければならないと思われます．チェコ版ロシア文法も，この矛盾を何となく感じていたのではないかと思われます．「おそらく」とか「きっと」という意味が明示的あるいは暗示的に含意されているという説明はこのためだと考えればよく理解できます．

§19　これらの小詞は代名詞に限らず，疑問詞にはすべて付くことができますから，-то を持つものを -то グループということにすれば，このグループは例えば現在あるいは過去の出来事については，これが指すものが原則として実在していたことを示すと言ってもよいと思われます．たとえば Я уви́дел кого-то у окнá.「私が誰かが窓の側にいるのを見た.」Кто-то стучи́т в дверь.「誰かがドアをノックしている.」などと言うとき，誰かは分らないとしても，それが実在していたことは確実なのです．時間や場所についても，たとえば Я когдá-то слы́шал эту пéсню.「私は以前にこの歌を聴いたことがある」，Я гдé-то потеря́л карандáш.「私はどこかで鉛筆をなくした」などと言うとき，その場所や時間は特定できないとしても，そういう場所あるいは時間が実在していたことは確実です．従ってこのグループは実在性を主張する場合にも使われると思われます．例えばおとぎ話で Жил-был корóль когдá-то. というとすれば，これは導入部ですから新しい情報なのですが，話の実在性が когда-то によって主張されます．元来 -то というのは指示詞と同源のものだと思われますから，その

[7] 例文のアクセント，日本語訳は引用者.

はたらきは話し手がそれを知っていることを保証し，あるいは知っていることを相手に同意させるはたらきを持っているのではないかと思われるのです．

§20　これに対して -нибудь グループはこの特徴をもっていません．従って今述べた文脈で -то グループに代えることはできないのです．-нибудь グループが過去あるいは現在の出来事に用いられるときには，原則として疑問になります．たとえば Вы с кем-нибудь говори́ли?「貴方は誰かと話してみましたか」というとき，話した人がいるかも知れないし，誰とも話をしていないかも知れません．実在の保証がないのです．Вы когда́-нибудь были в России?「貴方はロシアに行かれたことがありますか」という場合も同じです．従って平叙文の場合には未来の出来事について言われることが普通になります．たとえば，Я когда́-нибудь пое́ду в Москву́.「私はいつかモスクワに行くんだ.」過去の場合でもその実在性に疑いがあるときにはこのグループが用いられることになると思われます．上に挙げられている Я реши́л, что она́ хо́чет еще что́-нибудь сказа́ть мне.「彼女がもっと何かを私に言いたいのだと思った」のような例はこれに当ります．チェコ版ロシア文法の著者がここに蓋然性の存在を見たのは，正しいと考えられます．

§21　以上のことから -то グループは話し手がそれが指すことがらが実在していることを知っており，その意味で話し手にとって既知ですが，そこに含まれる要素を特定しようとしないか，あるいはできないことを示しているのに対して，-нибудь グループは実在するかしないかについて話し手に未知であり，したがって当然そこに含まれる要素の特定はできないか，あるいは蓋然性の形でしか示すことができないものを示す，と考えることができそうです．別の言い方をすると，既知であるか未知であるかというのが実在性に基いているとすれば，これはチェコ版ロシア文法の言う「具体性」に当ります．また要素を特定することができないかしないという意味で，「不定性」は「特定性」に当ります．しかしこれが同じ平面でどう結びつくかで区別されるというのではなく，その間に階層があるのではないかというのが，主張したいことなのです．いいかえれば，-нибудь グループの場合，「実在するかどうかは分らないけれど，実在するとすれば」という条件文の形で特定性が問題になるのだと思うのです．したがって「不定性」というのは，具体的な事象を直接に指すのではなく，その内包と外延の関係を指すものであると考えるのです．言換えれば，ある事象がある内包 (概念) の指す外延 (集

合) に属するかどうかがはっきりしないということを意味するともいえましょう．そうすればこの関係は，前に述べた「この事件の犯人は未だ特定されていない」という例文の構造とよく似たものとなります．

§22　もう一つ述べていないものに -либо グループがあります．この小詞 либо は любúть と同根の語で，もともと「好きな」という意味を持っていたと思われます．これまで述べてきた言い方をすれば，ある実在する集合を指定して，その要素のどれでもよい，言い換えればどの要素も選択される，同じ蓋然性を持っていることを表すものだと思っています．これについてはチェコ版のロシア文法は，上に引用したように，-нибудь グループと余り区別をしていません．その理由はおそらく，選択という概念が不定代名詞一般に共通するものだと考えているからだと思います．たとえば，

> 「選択の可能性」という特徴は，「不定性」という特徴に結びつき，「具体性の欠如」という特徴に関して有徴的であるかあるいは無徴的であるすべての代名詞によって暗示的に伝えられる [1, II *p.365*].

これが -нибудь グループと重なることが多いのは当然ですが，ある集合の存在が前提とされるという意味で -нибудь とは異なっていると考えられます．上で述べた言い方を使えば，ある内包が示す外延に属する要素について，その内のどれが選択されるかが決っていない (不定である) ということになりましょう．この点が -нибудь グループと -либо グループの根本的な違いであると考えるのです．

(14) 否定生格が使用される条件 — ブスラーエフの説明

§23　さてそれでは対格補語を持つ動詞が否定されたときの話に戻ることにしましょう．ポーランド語では動詞が否定されると対格補語がほとんどの場合否定生格をとることになっていますが，ロシア語の場合にも中世には，すべてにわたってではないにしても，否定生格を取る強い傾向がありました．著名な文法学者のブスラーエフ Федор Иванович Буслаев (1818-1897) はこれについて次のように述べています．

> 最も古いスラヴ語のテキストでは，聖書は後代よりも誠実にまた恒常的に，否定を伴った能動の動詞に生格を用いるというこの規則を守っていた．後になるとギリシア語の統語論に従って，時として生格は対格に代えられることがあった．例えば，オストロミール福音書

не имаши участи съ мъною... 「(イエスは彼に答えられた．もしわたしがあなたの足を洗わないなら) あなたはわたしと何の関わり (単数生格) もなくなる[8]」(ヨハネ 13,8)．オストロミール福音書では да не прѣтъкнеши о камень ногы твоеѭ 「あなたが足を (生格) 石に打付けられないように」であるが，異本では в испр. ギリシア語の τὸν πόδα(対格) と同じく ногѹ твою 「足を (対格)」(マタイ 4,6) となっている．.....古代ロシア語では，города не възяша *ниодиного.* (Новг. лет., 1,10)「(彼等は) 一つの町も (生格) 奪わなかった」(Мнѣ было выкупити у нихъ) *тое деревни* не мочно. (*Юрид. акт.* 1511)「私は彼等からこの村を (生格) 買戻すことはできなかった」.....しかしながら古代ロシア語や民衆語でも，また最近の作家たちによっても，時に対格も用いられた．例えば，приде *не* успѣвъ *ничто же.* (Новг. лет., 1,7)「(彼は) 何も (対格) 得ることができずに帰り着いた」; Не покину *веру* христианскую (Дух. стих. 2,79)「キリスト教の信仰を (対格)(私は) 捨てない」; *кисель* куры *не* клюют (*Бессон., Детск. песн.* 188)「雄鶏はキセーリ (乳酸飲料) を (対格) ついばまない」; Близь ложа там во мраке ночи/ сидел он *не* смыкая *очи.* (Пушк. II, 305)「彼は夜の闇の中で寝床のそばに/目を (対格) 閉じることなく坐っていた」．歌謡では，*Не* шей ты мне, матушка,/ *красный сарафан*...(Цыг., 28)「お母さん，あなたは私のために赤いサラファンを (対格) 縫わないで下さい.....」[5, *p.462 footnote*].

§24　ブスラーエフはこのほか「最近の」作家たちは特に否定された動詞が回説的な形を持つときに対格を用いることが多いとして，не хочу, не могу, не стану「したくない，できない，しない」etc. の例を挙げています．これは述語動詞の不定形を伴うので，後で述べるように，80 年文法で「間接的な」否定とされているものに当ります．彼の挙げている例を見ておきましょう．*не хочу* видеть *мою комедию* представленною прежде нежели...(Ф. Виз.)「.....より前に上演される私のコメディーを (対格)(私は) 見たくない」; чтобы восхищаться им, *не надобно* иметь *глубокие сведения* в искусствах. (Бат., I, 327)「それに有頂天になる為には，芸術に深い造詣を (複数対格) 持つ必要はない」などの外，特にプーシキンに用例が多いとして，я *счастие твое не мог* устроить. (I, 303)「私は君の幸福を (対格) 用意できなかった = 君を幸福にできなかった」; *не мог* привести в порядок *мысли,* смущенные столь

[8]原文は Ἐὰν μὴ νίψω σε, οὐκ ἔχεις μέρος μετ᾽ ἐμοῦ. で μέρος「運命」は単数対格である．

ужасными впечатлениями (VII, 179)「こんな恐ろしい印象で乱された思いを (= 心を)(対格) 整理することができなかった」; *я смею* взять на себя столь *великую ответственность* (VII, 179)「こんなに大きな責任を身に引受けることを (対格) 私はできなかった」; *не стану* описывать *оренбургскую осаду.* (VII, 180)「私はオレンブルグの包囲を描こうとはしない; *не могу* изъяснить *то,* что я чувствовал. (VII, 212)「私が感じたことを (対格) 説明することはできない」. ブスラーエフはこのような回説的な構文に生格形も用いられるとして, *не умеет* убирать *покоев* и учреждать *порядка.* (Бат., I, 284)「彼は安寧を (生格) やめさせて秩序を (生格) 建てることはできなかった」; *не в силах* Ленский снесть *удара.* (Пушк., I, 142)「レンスキーは打撃を (= に)(生格) 耐えることができない」; никто в нашем полку *не усомнился* подставить ему *своей головы.* (Пушк., VIII, 18)「私たちの連隊の誰も, 彼のために自分の頭を (生格) 捧げること (= 命を投出すこと) を疑うものは居なかった」などを挙げています.

§25　更に, ли, уже ли「はたして」のような小詞が用いられるときには, 対格も生格も用いられるとして, *не* терпит *ли* он *холод?/ не* чувствует *ли голод?* (Дмит. III, 26)「彼は本当に寒さを (対格) 我慢してはいないのか?/本当に飢えを (対格) 感じては居ないのか?」; Сие беспокойство — желание — предприимчивость — *не означали ли великую душу и нечто необыкновенное?* (Бат., I, 70)「この不安—願望—積極性—は大きな魂 (対格) と何か常ならぬものを (対格) 意味していたのではないのか」; *не* позабыл *ли* ты *старой должности?* (Пушк., X, 21,)「君は昔からの義務を (生格) 忘れたのではないのか」などを挙げています [5, *pp.462-463*].

§26　ブスラーエフの説明を見れば, この時代以前には否定生格が主流になっていたこと, そして対格がこの時期 (19 世紀) に用いられ始めたことが分ります. このことから述語が否定されたときに, 否定生格を取りにくい条件をより強く持つものから, 少しずつ対格形が用いられるようになってきて, 現在に至っているということができます. このような否定生格を取りにくい条件というのが, 動詞述語が否定されても目的語の存在はそれに伴って否定されることのないようなときではないか, というのが, ここで検証しようとしている仮説なのです.

もう一つ言えば, このような過程が未だ完成していない段階では, どのようなときに

生格が用いられ，どのようなときに対格が用いられるかは，一つの傾向としてしか現れてこないだろうということです．古い文章語で否定生格の使用が一般的であったとすると，同じような文脈の場合でも，より文章語としての性格がつよい作品では生格の使用が残り，口語あるいは口語としての性格が強く感じられるようなときには対格が使われるというように，文体による影響が見られるであろうことも，容易に理解できます．

(15) 現代ロシア語における否定生格

§27　さて，現代のロシア語でこの仮説が正しいかどうかを，80年文法の記述に従ってみていきましょう．まず生格しか使われない場合について考えてみます．もし仮説が正しいならば，これは否定生格が一番取りやすいものでなければなりません．このようなものとしてはиметь「持つ，有する」が考えられます．

「ある」という動詞と，「持つ」という動詞は存在に関して「表」と「裏」の関係にあると考えられます．「ある」というのは自動詞で，「持つ」というのは他動詞だということが違うだけだと言えるからです．近年になって自動詞と他動詞の区別を持たない言語類型 (活格言語類型) があることが分ってきましたが，このような言語では当然「持つ」と「ある」の区別はありません．このような言語では「持つ」の意味は「誰それのところにある」とか「誰それと共にある」というような言い方をすると報告されています．日本語でも「持つ」という動詞は比較的限られた場合にしか使われません．ロシア語の場合，中世にはиметь は非常に頻繁に使われていましたが，現在ではやはり限られた日本語で言えば「有している」というような，文語的なニュアンスを持って使われます．

§28　このことから，この動詞に否定生格が用いられるのは，この動詞が文章語的な性格を持っているためだ，という説明が聞かれることがあります．しかしこれは正しいとは言えないと思います．この動詞が否定生格をとるのを止めなかったこと，口語的な文脈で使われなくなったことの結果として，否定生格に文章語的な色彩が感じられるようになったので，話が逆だと思われるからです．それではこの動詞がどうして生格を取ることを止めなかったのかを考えてみますと，この動詞が否定されると，目的語そのものの存在も否定されることになるからだと思われます．80年文法ではこれについて次のようにいっています．

動詞 не иметь との結合のすべての場合に (生格が用いられる)．не имеет права「権

利を持つ」, значения「意義」, смысла「意味」, намерения「意図」, понятия「理解」, влияния「影響」; не имеет дома「家を持たない」, денег「お金」, машины「自動車」, брата「兄弟」, друга「友人」, сведений「情報」 [2, *p.416*].

§29　次に никакой「いかなる～も」, ничей「誰の～も」, ни единый「ただ一つの～も」, ни малейший「全く～も」, ни... ни「～も～も」, ничто「何も」, ни などと共に用いられる場合があります. たとえば,

Я слава богу, заслужила, могу сказать, всеобщее уважение и ничего неприличного ни за что на свете не сделаю. (Тург.)「ありがたいことに私は皆の尊敬を受けているといえます. だからどんな不作法なことも (生格) 決してしません」; Лиза подняла на него свои глаза. Ни горя, ни тревоги они не выражали. (Тург.)「リーザは目を挙げて彼を見た. その目は悲しみも (生格) 不安も (生格) 表しては居なかった」; ..... Наверно, «Волга» шла в город, но теперь ни он, ни я не сделали никакой попытки остановить ее. (Быков)「きっと«ヴォルガ»は町に行きつつありました. しかし今となっては, 彼も私もそれを止めようとするどのような試みも (生格) しませんでした」など [2, *p.416*].

§30　80 年文法によれば, 通例に反してこの構文は間接的な否定の場合にも生格を取るといいます. たとえば, Никакого заказу и никакой работы не смела взять на себя без позволения старухи. (Дист.)「老人の許しがなければ, どのような注文も (生格) どのような仕事も (生格) 引受けることはできませんでした.」[2, *p.414*.]

これらは存在の欠如が強調されていると考えられますから, 生格が使われていることは当然と考えられます. むしろ問題になると思われるのは, 80 年文法でここに挙げられている次の例です.

Ничто не могло остановить ни дыхания Москвы, ни ее мышленья, ни вращенья ее станков. (Леон.)

「何物も, モスクワの息吹きも (生格), その思いも (生格), その旋盤の回転をも (生格), とどめることはできなかった.」

ここで何が問題であるかと言えば, この場合には否定される動詞が存在の否定を表す

意義を持つ動詞だということです．したがってそういう意義をもった動詞が否定されるのですから，目的語によって示されるものが存在していることは疑いがないことになります．そうすればこれは「動詞が否定されることによって目的語で表されるものの存在が否定されるとき」に否定生格が使われるという仮説に反することになります．このような例については未だよく分りませんが，ни の構文に引きずられたのかもしれません．今後の課題としたいと思います．

§31　これに対して対格の使用が規範的なものとして，80 年文法は「対象の特定性と具体性と結びついている場合」を挙げています [2, II, *p.417*]．これは次のような構文の場合だとしています．

1) 文中に対象の特定性を示す代名詞が存在するばあい．
   Эту песню не задушишь, не убьешь. (Ошанин)「この歌は (対格) 窒息させ，殺すことはできない」; Не гляди с таким укором! Не хвали свои дары! (Р. Рожд.)「そんな非難する目で見るな，自分の才能を (対格) 自慢するな」; Старик Лаврецкий долго не мог простить сыну его свадьбу. (Тург.)「ラヴレツキー老人は長いこと息子の結婚を (対格) 許すことができなかった」etc.

1') 対象の特定性が接続詞 который による副文章によって示されるとき．
   Он не прочитал книгу, которую вы ему дали.「彼はあなたが彼に貸した本を (対格) 読通してはいない.」

2) 対象が活動体名詞あるいは固有名詞によって表されるとき．
   Со времени моего кондукторства я не люблю Лесную улицу. (Пауст.)「私が車掌になって時間がたつにつれて，私はレスナヤ通が (対格) 嫌いになった」; Но Суровцев уже понимал, что уйти, не повидав Веру, не в силах. (Чак.)「しかしスロフツェフはすでにヴェーラに (対格) 会わずに去ることはできないことを悟った.」

§32　80 年文法はこの第二の用法は古い文章語でも見られるとして，次のような例を挙げています．このことから，このような場合に生格ををとることが難しい強い理由があったことが分ります．

Вы не знаете Асю. (Тург.)「あなたはアーシャを (対格) ご存じない」; Я не

отвергаю преступную жену. (Л. Толст.)「私は罪深い妻を (対格) 拒んでいるのではない.」

第三の場合として 80 年文法が挙げているのは，次のような条件です.

3) едва не「ほとんど～せんばかり」, чуть не, чуть чуть не のように否定の не が小詞の中に含まれているとき.
Едва не уронил стакан.「すんでにコップを (対格) 落すところだった」; Чуть было не потерял билет.「すんでのところで切符を (対格) 失くすところだった」etc. [2, *pp.417-428*]

この条件は動詞を否定しているのではないために，厳密には否定文というわけではないばかりか，Едва не уронил стакан. のような例から明らかなように，却って目的語の表している対象の存在が強く意識されると言えるでしょう.

こういうわけでこれらすべてが，目的語の示す対象の存在が保証されている場合であることは，明らかだと思われます.

(16) いわゆる「間接的な」否定のばあい

§33　80 年文法ではいわゆる間接的な否定の場合には対格の使用が普通 (нормален) として Но говорить об этом она себе не разрешила, не желая портить ему настроение перед дорогой. (Симон.)「旅の前の彼の気分を (対格) 損うことを望まなかったので，彼女はこのことを話すことを自分に許さなかった」; Она не решился сообщить матери и Оле правду о своем несчастье. (Полев.)「彼女は母とオーリャに自分の不幸について本当のことを (対格) 告げる決心が付かなかった」; Мне школу не удалось закончить. (И. Грекова)「私は学校を (対格) 卒業できなかった」; Мне говорить неправду не положено. (газ.)「私は嘘を (対格) つくことを許されていない」などを挙げながら，一方では「しかしながら同様の場合に生格も普通である」として次のような例を挙げています.

Анна знала, что ничто в мире не может принести ей утешения. (Пауст.)「この世の何も彼女に慰めを (生格) もたらしはしないことをアンナは知っていた」; И орденов своих с собою им не положено иметь. (Симон.)「自分の勲章も (生格) 帯びることは彼等には許されていない」; Не хотелось читать нравоучений.

(газ.)「道徳を (生格) 読む気にはなれなかった.」[2, *p.418*]

この記述は説明そのものが矛盾していますが，どういう場合に対格が「普通」でどの場合に生格が「普通」なのかについては何も述べていません．しかし両方の使用の仕方を比べてみると，対格の場合はそれが示す事象が存在していることが確実だと思われる文脈に使われていることが分ります．「旅に出る前の気分」，「自分の不幸」，「私に対して吐いた嘘」，「私の学んでいた学校」などが存在していたことは確かなのです．これに対した後の場合は述語動詞が否定されるに伴って，生格に立つ名詞の示す対象の存在も否定されると考えられます．иметь の否定にもこのことは示されますし，また нравоучений が「教訓など」という一般的カテゴリーを表す複数であることも，この考えを支持すると思われます．

(17) 否定詞を伴うばあい

§34　この他，некому「だれも ～ ない」，негде「どこにも ～ する場所がない」，некогда「～ する時間がない」のような「否定述語」をもっている否定文の場合にも対格形を用いることが多いとされています．たとえば Некому показать работу「作品を (対格) 見せるべき人がだれも居ない」; (Негде публиковать статью「論文を (対格) 発表する場所がどこにもない」) のような場合です．これらの場合には存在が否定されるのは「否定述語」の表す対象で，目的語の存在はむしろ当然の前提となっています．

(18) 生格と対格の競合

さらに，生格と対格の間の競合が見られる場合には，文章語的な色彩の強い文章の中では，対格がよく使われる傾向があるなど，文体との関係についても触れられていますが，その中に生格が好まれるものとして，видеть「見る」，слышать「聞く」，чувствовать「感じる」，замечать「認める」，понимать「理解する」，знать「知っている」，помнить「思い出す」 などのような，感覚あるいは思惟に関する動詞が否定される場合というのが挙げられています [2, *p.417*]．たとえば Ответа полковника Григорий не слышал. (Шолох.)「中尉の返事は (生格) グリゴリーには聞えなかった」; И опять Поля не поняла его ревнивого вопроса. (Леон.)「そして再びポーリャは彼のねたみ深い質問を (生格) 理解できなかった」; Он стадиона не видел, не слышал, не помнил. (Р. Рожд.)「彼はスタディオンを (生格) 見たこ

とも，聞いたことも，理解することもできなかった.」

この種の動詞はこれまでのものと少し違うように思われます．これらの動詞が，スラヴ語では本来生格の補語を取っていたと考えられるからです．たとえばブラホフスキー Леон Арсеньевич Булаховский (1888-1961) は次のように述べています.

> 永続する知覚を意味する動詞 (稀には感官による知覚一般) は古代ロシア語で完全には把握されない対象の格としての生格を支配していた (完全な把握は以前から対格によって表されていた)[4, *p.292*].

ここでブラホフスキーが「永続する知覚」といっているのは，実質的には「不完了のアスペクトをもっているとき」というほどの意味だと思われます.

彼がここで挙げている例をいくつか引用しますと，次のようになります.

1. слушать: Слушали мы в соборной церкви ...всенощного пения. (Дело Ник. № 36)
   「私たちは本山教会で徹夜の祈りを聞いた.」
   cf. и вы тое нашу царского величества грамоту выслушали. (Грам. ц. Мих. бухар. царю Надар Магомету 1645)
   「あなた方は皇帝陛下のこの文書 (を読むのを) 聞き終った.」
2. чаять (= слушать): А побегу де их чаять с казаками на Дон. (Мат. Раз. II, № 43)
   「彼等がコザックとドンへ逃亡したのを聞いた.」
3. смотрить (смотреть): всегда в торгу смотрити всякого запасу. (Домострой)
   「常に市場ではどんな蓄えにも注意を払うこと.」

このことから，これらの動詞の否定構文に用いられる生格の補語は，本来否定生格ではなく，むしろ部分生格であったと推定できます．これらの動詞が肯定形で対格補語を取るようになって，否定構文の生格補語が否定生格と意識されるようになったのだろうと思われるのです.　(2001.8.15)

関係文献

[1] Československá akademie věd
Русская грамматика, 1-2, Praha 1979.

[2] АНСССР
Русская грамматика, 1-2, М., 1980.

[3] В. Н. Ярцева, red.
Лингвистический энциклопедический словарь, М. 1990.

[4] Леон Арсеньевич Булаховский
Исторический комментарий к русскому литературному языку, пятое, дополненное и переработанное, Киев 1958. Rep. Leipzig, 1974.

[5] Федор Иванович Буслаев
Историческая грамматика русского языка, М., 1950. Rep pub. 5 ed. (1881).

[6] 山口　巖
「古代ロシア語における第二対格について」『人文』第 23 集，昭和 52(1977) 年.
再録 『ことばの構造とことばの論理』古代ロシア研究特別号 1998.

Summary

In *margine* of the use of *genetivus negationis* in the Russian language

Iwao YAMAGUCHI

The author has argued about the meaning of the negation from the cognitive point of view in another paper. This article aims at supplementing my own argument in relation to some explanatory devices brought forth by the Academy Grammar published in 1980(1980 Academy Grammar).

1980 Academy Grammar asserts, classifying the use of *genetivus negationis* into two categories: the obligatory and the facultative ones, that this distinction depends on the factors whether the object in view is definite or not, really existing one or not, and known or unknown to the speaker or the hearer.

construction	definiteness	existence	knownness
obligatory	−	−	?
facultative	+	±	+

But such assertion is made, as is often observed, without clear definitions of these criteria and the results obtained are rather obscure and remain 'indefinite'.

The author examines the use of *genetivus negationis* in some details and concludes, that the basic function of *genetivus negationis* consists in that it denotes the non-existence of the object mentioned.